

旧友、光岡淳一君のこと

―学徒出陣から70年―

島内 二郎



昭和十八年 京都大学生の頃の著者

※この文章は私の父、島内二郎（1910～1994）が、佐賀県の郷土雑誌「新郷土」昭和44年7月号に書いた「旧友光岡淳一君のこと」という随想を元に再構成したものです。

島内行夫

■京都へのあこがれ

光岡淳一君は佐賀市高木町浄照寺の前任職故磁照氏の長男である。大正十一年一月生まれで、私と佐賀中学、昭和十四年卒の同級生である。過ぎる太平洋戦争で同窓生から五十名近くの戦没者をだしたが、その中で忘れられない友の一人である。体格は中肉中背、私とあまり変わらなかったため体操や剣道の時間によく相手になった。面長で女性的な声で妙に惹きつけられるものがあった。無口ではあるが負けることの嫌いで、鋭い頭の閃きには時々圧倒されるものがあった。

関西への修学旅行はたしか佐賀中学四年生の時だったと思う。戦時とはいえ、

はじめて訪れた落ち着いた京都での一日は、私には忘れることができない。

五条の賀茂川べりの欄干に手をかけて、黒々とした東山の遠景を川越しに眺めながら、光岡君は寺の息子らしく京都のことをいろいろ私に話してくれた。よし、高等学校にいくなら第三高等学校を受験しよう。私はその時ひそかに決心した。

いよいよ卒業が近づき、上級学校への願書を出すときになって、私はそのことを父に相談したら、すぐ近くに佐賀高校があるではないかと一言のもとに反対された。私もそれもそうだとあっさり佐高に願書を出してしまった。それでもあきらめられなかったとみえ、卒業式の時もらった学事概要がまだ手元にあるが、それには私の志望校は単に「高校」となっている。

私はその年の四月、無事佐高に入学したが、光岡君の姿はみえなかった。たぶん失敗したのだとその時思った。

■京都大学へ

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争がはじまり、その翌年、佐高から大学へ進学する時期にさしかかった。私は当時のベストセラー田辺元の『歴史的現実』にいたく心をひかれ京都大学の哲学科を志したが、これ又、父に哲学でこの戦時中に暮らせるかとひどく叱られたのでこの時もあるさう哲学をあきらめ法科に進んだ。

太平洋戦争の緒戦の勝利もどうやらあやしくなり、米軍機がしばしば東京の上空をかすめはじめた昭和十七年の春であったが、京都で始まった学生生活は戦時とはいえまだ自由で希望にみちたものであった。

はじめての夏休みに郷里に帰ろうとする或る日、地元の新聞に手拭の向こう鉢巻をしめ、にっこり笑った光岡君の顔写真が大きく載っているではないか、三高生の光岡君なのだ。

記事によると彼は三高のボート部の主将としてインターハイで宿敵一高を琵琶湖の瀬田コースで破ったという。今でいうスポーツ新聞にも彼の勝利の談話が語られていた。私はやられたと思った。三高の難関を突破していたのである。彼は中学の旅行の時、私と同じく三高進学をひそかに決心していたかも知れない。しかし、それから彼の三高生の姿はどうしたことか記憶がない。

京都大学二年生の春、偶然東山通りの市電の人混みの中で彼と会った。彼は京都大学文学部で宗教哲学を専攻していた。三高ボート部のバンカラ主将だった面影はなく中学の時そのままのなつかしい声を聴いた。東山黒谷の何とかという寺に寄宿しているという。その寺での再会を約して別れたが、何分にもその頃からぼつぼつ学生の徴兵猶予停止の噂があったので学校の講義はにわかにはスピードがあがり学生はよく勉強した。彼と共に残る京都での学生生活を楽し

むことは遂にできなかった。

■学徒出陣

昭和十八年十二月十日、それは私たち当時の大学生が生涯忘れようにも忘れることができない学業中途での臨時招集の日だ。

昭和四十二年に、同期の戦没学生の遺稿集「あゝ同期の桜」が毎日新聞社から刊行され、芝居やテレビで紹介された第十四期海軍飛行専修予備学生約三千二百名もその学徒出陣生たちである。

学生服姿に帯剣、肩に銃を携えて平安神宮まで行進した時、「これで学生生活は終わった」と寂しかった。それと同時に両親や兄弟のことが思い浮かんだ。戦地に赴くことはやむをえないと諦めていた。まして生きて帰れるとは思ってもしなかった。しかし死にたくない、もつと勉強がしたいという願望も同時に引きずっていた。

父が海軍の退役軍人であったので、その影響もあつてか海軍を志望し、海兵团に二等水兵で入隊した。光岡君とは再び佐世保海兵团で会うことができた。翌年二月共に少尉候補生にあたる海軍予備学生に合格した。スマートな海軍上官服に短剣を吊るべく私達はそれぞれ別れて兵学校並みの士官訓練をうけることになった。昭和十九年二月多くの同僚と共に、光岡君は霞ヶ浦の海軍航空隊へ、私は鹿児島海軍航空隊へと派遣された。

そしてそれから三ヶ月後、私は搭乗員としてではなく飛行要務学生として選ばれ静岡県大井海軍航空隊に特別の訓練をうけるため転じたが、全国各地の練習航空隊から集まる百名足らずの人員のなかにくしくも光岡君を発見した。

大井航空隊は大井川の河口をはさむ二つの町、金谷と島田から北へ平坦な山をのぼったところで、茶畑を切り開いた航空母艦のような形の台地にあつた。さすがにお茶で知られた処だけに周囲は見渡す限りの茶畑が広がり、その果てるところに富士山がそびえ、朝日夕日に美しく映える雲峯に向かい、光岡君と私は厳しい訓練の合間、京都に残した生活のこと、佐賀に残した肉親のことを語り合った。

そして航空隊士官教育半年を経た一九年の八月、私達要務学生は漸く練習機の操縦に慣れた搭乗員の同期の学生より半年も早く、学生のまま南方の最前線や航空艦隊に配属されることになった。私は海軍の実戦部隊がいる岩国基地に配属された。そこで本来なら航空母艦・隼鷹（ジュンヨウ）に載って戦地に行くはずだったが、隼鷹はマリアナ沖海戦で損傷を受け、修理とあつてそのまま地上勤務となった。印象に残ったのは基地から一度に百機前後のゼロ戦が飛び立ち、帰還したのは僅かだったことだ。

一九年の十二月、中国・上海基地に赴いた。東シナ海を行き来する輸送船団

の護衛が主な任務だった。

二十年一月ごろ、その上海の海軍航空基地の司令塔が米軍機の攻撃を受けた時、敵機の銃弾が伏せていた自分の頭をかすめた。その通り抜ける金属音がいつまでも耳に残り、今でも耳鳴りに悩まされている。

■白い手袋

話は前後するが、たしか十九年の旧盆をすぎた頃だったと思う。大井航空隊にて一緒だった光岡君と私は許されて、出征以来はじめて両親や姉弟に会うため金谷の駅から夜行列車の一等車に乗り、白い日覆の軍帽に真白な第二種軍装に短剣をつり、汽車の煤煙で服の汚れを気にしながら翌日の昼炎天下の佐賀駅に着いた。二人は駅から家には直ぐには帰らず呉服町の玉屋デパートに直行。あまりの暑さに汗とほこりで真黒になったハンケチと手袋を新しいものに替えた。

「元気でまた会おう」

と買ったばかりの白い手袋の手を降って笑顔でそれぞれ自宅へと別れた。

僅か数日の休暇の後、大井に帰隊して任地の発令を待った。彼はフィリピンに征くため香取航空隊に、私は某航空隊に配属のため岩国航空隊に発令され、同期の百名も飛行場で互いに帽子を振って別れた。そこで彼とは永遠の別れとなってしまった。

私は終戦の翌年昭和二十一年三月、最後の任地となった上海の基地から佐賀の実家に復員した。光岡君がフィリピンで戦死したことはそれから間もなく知ったが、御遺族にお会いするのがつらく、長く高木町のご両親をお伺いする気になれなかった。

私は終戦後、佐賀県庁に勤務し、七年前（昭和37年）私立学校の仕事を担当していたが、県内の幼稚園の園長会議で藤影幼稚園の園長さんをされていた光岡君のお父さんにお会いした。遺骨がないままだが淳一の特別の墓を建てたので一度見に来るように言われた。

淳一君の墓はまことに父性愛あふれるものであった。四面が二十糧の中、高さが背丈くらいの細長い石塔でいかにも若人の墓にふさわしい。その墓石の西面には南無阿弥陀仏の文字が大書きされ、その東面には淳一君の出生以来の略歴が詳しく書いてある。南面には防人の歌

「人なれば花にたとふる君なればちりぬることの永久にあらなむ」

と刻まれ、そして北面には、淳一君のお母さんにあてた絶筆全文が碑面に刻まれている。

今宵親父と呑んで愉快なり故国を去りて今し征かんとし意気益々盛なり盡忠の誠を披歴し皇恩の万一に答へ奉らん御佛の前に座しては心気清遙かに故国の人々の御健康を祈る

十二月二十日 於 台南 淳一

母上

この文は、お父さんが布教のため台湾に行かれ、たまたまフィリピンに立つ淳一君に会われ、昭和十九年の十二月二十日父子相別れる際、母上あてに書いた手紙であり、その日は、同期の者すべてが少尉に任官して二十日目である。

淳一君の戦死はルソン島クラークにて、昭和二十年四月二十四日と公報にある。あの日、大井航空隊を出た学生で戦死者は三十四名であり、その多くは比島において同日付前後となっている。いかにその日が同期のものにとって悪夢の日であったか、想像にかたくない。

墓碑に刻まれた絶筆を今の学生諸君は想像も及ばない狂気と錯乱とを読むであろう。当時の検閲の目のなかで表現の自由はなかったのだ。たとえ僅かばかりの自由があったとしても、その純情と気負いのみを表現し心の真実を表現する方法を使いこなすにはまだあまりに若かったのだ。その事を理解してほしい。お父さんは書が得意な方であられたが、その後間もなく病気で亡くなられた。

了

【あとがき】

父、二郎のこと

私の父、島内二郎は、佐賀県牛津芦刈村の出身で日本海軍の大佐（大戦中は退役軍人）であった島内琢一郎の次男として、大正十年八月三十一日に赴任地であった台湾の澎湖島の日本海軍基地で生まれ、平成六年七月二十三日にクモ膜下出血が原因で亡くなりました。享年七十三歳でした。突然のことでしたので、おそらく本人は死を意識する間もなかったのではないかと想像しています。

この随想は、父が佐賀県の郷土雑誌『新郷土』昭和四十四年七月号に「旧友光岡淳一君のこと」という一文を書き、その後、平成五年八月十三日佐賀新聞に「青春の鎮魂歌…学徒出陣から50年 再開誓った友帰らず」というタイトルでの本人に対するインタビュー記事があり、それらを併せて私がまとめたものです。父は戦時中のことはこの他にも手帳に鉛筆の小さな文字でぎっしり日記として残しているのですが、私はまだ読みきれていません。

父は生前、戦争のことはごく断片的にしか話さなかったもので、ここに書かれていたことも私自身も目にしたような覚えはありませんが、正直当時は聞き流すような感じでした。父の文章の最後の箇所にある「今の学生諸君は・・・」というくだりには、昭和四十四年頃、全国の大学で学生運動が吹き荒れた時代に、反戦平和を標榜した学生たちが、(すなわち私たちの世代ですが)父の世代の戦争への協力的態度を厳しく糾弾していたことに対する思いが込められています。

しかし、私自身が父の晩年の年齢に近づき、あらためて読みなおすと、当時感じていた思いと全く違う感慨を覚えます。

先の太平洋戦争(第二次世界大戦全体がそうでしたが)はまさに国民全体を巻き込んだ、逃れることが許されない戦争であり、人間の人間による大量殺戮ゲームでした。そして、戦後に生まれた私達とは、その殺戮ゲームに生き残った人々の子供達であるのだというごく単純な事実があります。

父と旧友の光岡氏の生と死とは、まさにサイコロを振って決まったようなもので、もし、父が予定通り航空母艦隼鷹に乗っていたら、もし、敵機の機銃掃射の弾丸が数ミリずれていたら、もし、フィリピンに行っていたら、私という人間も存在せず、このように父のことを語ってはいなかったでしょう。

先の戦争で死ななかった、あるいは死ねなかった父や母の子供達、「ボクらは戦争を知らない子供達さ」と約四十年前、フォークソングを歌っていた世代も、いまや老境に差しかかるとき、私達の世代にできることがあるとすれば、父母たちの戦後を生きぬいて私達を育ててくれたことに深く感謝しつつ、このような戦争のもつ本質的な悲惨さ、非理性的な狂気に満ちた人間の営みと共に、戦後生まれの私達には決して見出すことが出来ない父母たちの心情を、次の世代に確実に伝えていくことであると思います。

終わり